

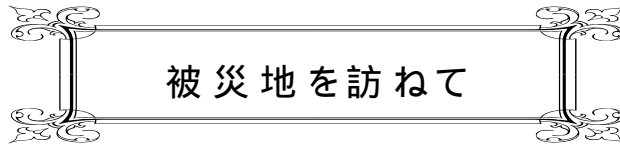
2012 年も残り 2 ヶ月を切ってしまいました。地球温暖化の影響でしょうか、「秋」がたいへん短いように感じますが、皆様はいかがお過ごしですか？

昨年の大震災から 1 年半が経過し、9 月 30 日（日）礼拝後に、「被災地を訪れて」と題して、社会委員会の学習会を行いました。

実際に被災地を訪れる貴重な経験をなされた A.T 姉（青年会所属）と N.N 兄（壮年会所属）よりお話をうかがいました。当日は、N 兄の妹さんの M.I さん親子（福島在住）が出席され、被災地に住んでおられる立場からの思いを私たちに語って下さいました。筆舌に尽くし難いその思いをひしひしと感ずることが出来ました。それは、被災地の方々を代表して私たちに伝えてくださったメッセージとして、強く私たちの心に迫るものがありました。聞いた私たちは、その言葉を重く受け止め、これからの生き方に反映していく責任があるのではないのでしょうか。

参加者は 44 名（男性 16 名、女性 28 名）でした。参加者の皆様、ありがとうございました。

（社会委員長：Y.M）



## 被災地を訪ねて

～ ボランティアツアーに参加して ～

A.T

私は、今からちょうど 1 年ほど前の 9 月 18 日、千葉県のはな交通バスが主催するボランティアバスツアーに参加しました。

### ツアー参加までの経緯

3 月 11 日の震災後、バスツアーに参加するまでに、募金をはじめ何かできることはないかと思ひ、まずは日用品が足りていないということで、日用品の郵送を考えました。

・知り合いにまだ募金、物資が末端まで届いていない福島のいわき市に 3 月末にトラックで物資を届けるという人がいたので、トイレトーパー等、日用品をゆうパックで送付し、委託。

次に、夏になると、物資が足りてきたため、他のボランティアを探しました。

・被災地で津波に流された写真を東京で洗浄・整理等して手がかりになることを書いて送り返すボランティアに参加。

そして震災後半年たった頃、テレビで見るだけでなく、やはり一度は実際自分で現地に行き、被災地を見てみたいという思いがあり、ボランティアツアーを探しました。

ただ、平日に休みを取って参加するのは難しく、ボランティア初心者であったため、3 連休の 1 日目深夜に東京駅を出発し、翌日 1 日ボランティア活動をして、またその日の夜遅く東京駅に帰ってくるというツアーを見つけて申し込みました。活動場所は宮城か岩手の範囲で、活動内容も必要に応じて当日決まるというものです。

ボランティア活動の準備について  
活動は1日でしたが、事前に準備が必要でした。

- ・地域の社会福祉協議会がやっているボランティア保険(天災型)に加入。
- ・帽子、軍手(汗を吸収するため)に台所用より厚手のゴム手袋、汚れてもいい服、分厚いスポーツ靴下にゴム長靴、防塵メガネ、使い捨て防塵マスクという装備の準備。
- ・トイレ、飲料水に不自由するという事で水の準備



#### ツアーの状況

大型バス2台でほぼいっぱいになるほどの参加人数で、男性女性問わず、年齢も大学生くらいの人から40~50代くらいと思われる人まで、さまざまな人が参加していました。バスの隣の席には、海外が好きで専門のツアー会社でリビアや、バングラデシュに一人でツアーに参加するというたくましい67歳の女性(今回最年長と思われる)が1人で参加していました。1人参加も多く、リピーターもいました。

1度パーキングエリアで休憩をとり、朝5時ころ大きなパーキングエリアに着いて、朝ごはん及び着替えのため1時間くらい休憩の後、8時台に今日の作業場所が決まり、作業地に向かいました。

#### 被災地の状況

作業地に向かう途中、川の河口近くどこまで海水が来たかを示す跡や、民家が柱以外めっちゃめっちゃこわれて木のくずになってしまっているところを通りました。

津波の通り道により、すぐ近くでも、ほぼ家が全滅してしまっている通りと、ほとんど壊れていない通りがあったのが印象的でした。

また、途中の家の屋根に、瓦がずれているのかビニールシートとそれを抑える砂袋が乗せられている光景をたびたび見ました。

海の近くは、滞在するとヘドロのにおいが服についてとれないと聞いていましたが、私が訪

れた場所は、においは感じませんでした。

#### ボランティア活動の内容

当日の作業場所は、石巻市内の小学校の近くの田んぼのあとで、広さは横浜港南台教会の敷地5個分くらいありました。

作業内容は、一度集めたがれきを収集車が来たときに収集しやすいように、木くず、鉄くず、不燃ごみ等に分類して、道路の近くに移動させる作業でした。

田んぼの裏は小高い山になっており、山の方には知識のあるボランティアが入り、外国人のボランティアグループも来ていました。

埃が舞うため、防塵マスク、メガネは作業に役立ちました。木くずも釘がついていたり、ささくれだっていたりするので、軍手とゴム手袋が必須でした。まだ9月で暑いため、1時間に1度は休憩をとって作業を行いました。

運ぶのに一番重かったのは、たっぷり湿気を含んだふとんや毛布、たたみ類でした。がれきの山からは、他にもおもちゃや食器など、生活用品の破片が出てきました。

今回のツアーでは、作業地から道路を隔てたところにある仮設住宅の1室を荷物置き場として借りていたため、トイレには不自由ませんでした。

実際に顔を合わせることはありませんでしたが、洗濯物がすぐ近くに見えるくらい被災者の方々の生活場所の近くで作業をしたので、写真撮影など配慮するようにと注意されました。

#### 思ったこと

被災地に関する情報について、インターネットが普及したこともあり、私たちはたくさんの画像・映像を迅速に、また簡単に見られるようになっていくことを感じます。

また、17年前の阪神大震災の時に比べ、東日本大震災のケースでは、地域的に広いこと、一番人口が集中している首都圏に近いこと、インターネットが発達したこともあり、日帰りから長期まで、さまざまなボランティアツアーが催

行されているようになったと思います。

東北に観光に訪れることで貢献、東北の物を買って貢献など、活動の選択肢の幅も広がっており、支援活動に参加しやすい環境になっていると思います。

実際、被災地が広範囲なので、今回活動したような、がれきを数メートル移動させるだけの作業であっても、人手と時間がかかるため、復

興までには息の長いボランティアが必要だと感じます。

私たちは、つい日常生活に追われてしまい、継続して被災地のことを思い、支援することはなかなか難しいですが、まだまだ復興は終わってないことを覚え、何が自分にできるのか、あらためて考えてみる必要があると強く感じました。

< 行 程 >

日程	時間	活動内容	食事
1日目	21:00 ~	各地出発 <東北道> (車中泊) 途中サービスエリアにて休憩	夕食: x
	24:00 発		
2日目	~ 8:30 頃	宮城県沿岸部被災地ボランティアセンター到着 ボランティアリーダーからの活動内容説明・グループ分け	朝食: x 昼食: 弁当
	9:00 ~ 15:00 頃	各地活動場所にてボランティア活動	夕食: x
	16:00 ~ 17:00 頃	仙台七夕温泉(入浴・休憩) さっぱりと汗を流して帰ります。	
	23:00 ~ 24:30 頃着	<東北道> 各地到着	

作業時の格好  
(イメージ)





### 被災状況

福島に住む甥とともに被災地を訪ねました。下調べ、段取り、撮影、編集、発表のための映写はすべて甥がしてくれました。「ついでにお前が説明もしてくれよ」と頼んだら、「それだけは伯父さんが自分でしてください」と言われました。

行ったのは、2012年3月、5月、9月の3回で、すでに被災から1年を経ており、瓦礫は片付けられていました。訪ねたところは福島の放射線被災地と仙台の知人宅です。

福島県相馬市の松川浦から仙台へと沿岸を北上しましたが、住宅は全て破壊され、片付けられ、一面に雑草のしげる更地と化しておりました。人気は全くありません。過疎化対策がこれからの問題と思います。座礁し、折れてしまった超巨大船バルカー（石炭運搬船）、破壊された鉄筋コンクリートのポンプ場、根元からへし曲げられた松の大木、レールをもぎとられてしまった常磐線等々、津波の凄まじい破壊力を示しておりました。70年の人生で、いずれも初めて見る光景でした。遺骸発見箇所を示す赤いリボンをつけた竹棒があちこちに見られ、壁を津波にぶちぬかれた鉄骨構造、基礎からもぎ取られ、丘の上に運ばれてしまった家屋、グシャグシャになった自動車の集積場には、ただただ息を呑むばかりでした。宮城県山元町の中浜小学校は校長の機転で2階の屋上に退避し、生徒59名全員が助かったところですが、2階の窓は破られ、高い体育館の天井はもぎ取られていました。同じく亘理町の荒浜小学校は、地域住民が4階の屋上まで避難し、ヘリコプターで救出されたところでした。付近には、慰霊碑、励ましの言葉が記された立て看板と黄色いハンカチの万艦旗がありました。

### 警戒解除地区

2回目は、原発から30km圏内の侵入禁止が解除されたところを訪ねました。レンタルビデ

オのツタヤが放射線測定器を無料で貸し出していたので、それで測定しながら行きました。放射線量は自動車の中でも車外でも変わりません。簡単にガラス、鉄板を透過していました。1年経過した現在の線量は、大分落ちていました。原発から30km圏外でも爆発当時風下だった福島市、川俣町、飯舘村は、現在も0.6とか1.9マイクロシーベルトを示しました。原発に近づいても、風下でなかった南相馬市は、0.1マイクロシーベルトと低い値を示しました。さらに原発から11kmの浪江町に入ると、6.0に上がりました。ここでは瓦礫の撤去は終わっていません。地盤沈下と排水ポンプ場の破壊で、宅地が水面下となっていました。消防自動車の残骸がいくつもありました。警告に行った消防団員の多くが津波に巻き込まれてしまっております。津波の被害のない小高地区では、倒壊した土蔵がありました。ここは線量が高く、入ることができても、住むことは禁止され、片付けられていません。

### Aさんのこと

仙台のAさんを訪ねました。25年前、仕事で仙台に1年3ヶ月ほど出向していた頃、地元の教会の祈禱会で知り合った婦人です。その後、私は東京の本社勤務に戻り、Aさんとはクリスマスカードをやりとりしていました。Aさんは次のように語られました。

「地震によって停電となり、テレビを観れず、近くまで津波が迫っていることを知りませんでした。幸い幹線道路が津波を食い止めたので、家は浸水をまぬかれましたが、近所の家は皆床上浸水しておりました。周囲の人たちは皆避難してしまい、私一人が家に残っておりました。勤め先の息子は、私がとっくに避難したと思い避難所を探しまわっていたのです。幸い水道は使え、ガスはプロパンだったので、冷蔵庫に残されたものでなんとか食いつないでおりました。その後、息子は被災者へのボランティア活動に

奔走し、嫁は亡くなった父親の会社の社長職を引き継ぎ、家のことにかまっておれませんでした。私は老後を心配した息子に引き取られたはずなのに、家のことを任せられ、疲れ果てました。」

25年ぶりの再会でした。お互いに顔は忘れていました。Aさんは突然訪れた私の手をいつまでも握っていました。不安と孤独の中で必死に生きてこられたのでしょうか。

2回目にAさんをお訪ねした時、息子さんのことを述べられました。

「息子は今、癌を患い、放射線の治療を受けています。けれども、あと4カ月の命かもしれないと宣告されました。クリスチャンである彼は、余命を人のために捧げたいと思ったのでしょうか、震災ボランティア活動に励み、1週間、10日間と出かけたまま戻ってきません。安静にしていれば治るかもしれない病も、これでは悪化してしまうのではないかと、私は気が気ではありませんが、何も言うことはできません。嫁は耐えられないのでしょうか、しばしば彼を激しく非難しております。しかし息子はその生き方を変えようとしません。」

Aさんは地震で棚から落ちたものを片付けていました。そしたら、一通の手紙が床に落ちていたそうです。それは、いままで捜しても見つからなかった手紙でした。雨宮慧神父からの礼状でした。そこにはイザヤ書46章4節の言葉が記されていました。このような状態の中で聖書の言葉の持つ力に改めて感動されたそうです。

わたしはあなたが年老いるまで  
白髪となるまで  
あなたがたを持ち運ぶ。  
わたしは造ったゆえ、必ず負い  
持ち運び、かつ救う。



土着ということ

原発から11kmの浪江町に入った時、「希望の牧場」がありました。そこで牛の牧場主、吉沢正巳氏に会いました。牧場の入り口には「希望の牛を生かして!」「殺処分、餓死はやめよ!」

というアピールが掲げられていました。

吉沢氏は「県では牛1,000頭を殺処分した。自分は殺すに忍びなく、今300頭を世話している。これらの牛はセシウム汚染されているから育てても意味ないが」と言われました。吉沢氏は、当初からこの地では数少ない「原発建設反対派」で、その運動を続けてこられたそうです。

「今回の事故では、自分が最初に東京に出て抗議をした」とおっしゃいました。ネットで調べたら、彼は東京農大で自治会長をされており、抗議活動においては、すでに著名人でありました。彼は牧場にセシウムの除去も期待でき、同時にそれがエタノール(自動車の燃料)の原料となる植物を育てることを模索していました。この言葉に、私は都市生活者と農業、牧畜に生きる人との違いを実感しました。

福島放射線被災地の人々は表土をはがし、側溝の泥を除去し、草を刈り、木の枝を下ろし、果樹の樹皮をはがし、なんとか放射線除染をし、土地をなんとか再生しようと苦闘しています。ここに居残り、ここに生きる道を模索しています。

私たち都市生活者は、土地が汚染されたなら「さっさとそこを去ったらいいではないか」と思います。しかし、山村に定着する人々は、土地、山林、畑とともに生きています。そこで先祖代々の伝統、生活様式を継承し、墓を守り、祭りを行い、コミュニティーを形成して生きています。彼らにとって、土地からはがされることは、自分たちのアイデンティティー(独自性)を引剥がされることであり、自分が自分でなくなってしまうことです。今回、横浜港南台教会は被災地に多額の支援金を送りました。それは大きな助けになるでしょう。しかし、それだけでなく「土着」する者の思いを私たちが理解し、共感することが必要ではないかと思いました。このことを伝えなければならぬと思い、今回報告することを引き受けました。

パラダイムの転換

「パラダイム」という言葉は元来「範例」と訳されていました。しかし、現代用語では広範

困な意味を持たせております。それは「ある時代における物の考え方、見方や捉え方」、またそこからくる「政治、社会、経済、科学の仕組み、構造を表すことば」として使われています。

「原発の問題」は単に「エネルギー政策の転換」だけにとどまらず、「現代社会のパラダイムの転換」が迫られている、とされています。具体的にはどうということでしょうか？

先日、郷里の弟の嫁さんから「お母さんの遺品を処分したいから、必要なものは持って行って」と言われました。それで物置をのぞいたら、大きなコンポ、(ラジオやCDやテープを聞く装置)がありました。それを見て「あー、これが現代のパラダイムだ」と思い当たりました。コンポが故障した。修理代は高いから、また新しい物を買う。これが壊れたら、修理しないでまた買う。このようにして次々にゴミを増やしていく。自動車もそう。着物もそう、テレビもそう。次々にゴミを作っていく。大量生産、大量消費の時代、いくら資源があっても、いくらエネルギーがあっても足りない。作ったものを大切に使い、故障したら修理するというのを止めてしまっている。

これは「現代のパラダイム」の一例であって、実際はもっともっといろいろあるのでしょうか。そして、それが巨大な組織、巨額のシステムの中に組み込まれて、手をつけられない状態になっている。けれども、それをそのままにしておいたなら、地球環境の破壊、生物の滅亡へと進んでいく。そのことを今回の原発事故は警告しているのではないのでしょうか。

人間は素晴らしい

被災地の悲惨な状況の中でいろいろな人に逢っているうちに、意外なことに、「人間ってなんて素晴らしいんだろう！」と感ずるようになりました。人は破局に直面すると、その人の芯にあるものが外に現れてくるのではないのでしょうか。Aさんの息子さんは「あと4カ月の命」と宣告され、自分の体をいたわらずに他人のために夢中で働いておられました。

また、中沢牧場を訪ねたときのことで、こ

んなことがありました。薄暗い牛舎の中、牛の糞と尿と泥がこねくり回された土間、立ち込める臭気、モーモーと鳴く牛たちの声、その中で一人の乙女が働いていました。通り過ぎた私たちに気づき、彼女は振り返り、微笑みました。その色白の丸顔を見た瞬間、私は暗黒の中に光り輝く天使を見る想いがしました。

放射線量がまだ比較的高く、皆逃げていく所で彼女は働いている。若い身、これから母親になる身、こんなところにはいけないよ！皆逃げていよう！相手はもう役に立たない牛ではないか・・・！

それなのに、ここにあって飛び込み、泥んこになって牛の世話をしている。その顔は喜びに輝いている。彼女は「牛」が可愛くて仕方がないのでしょう。そのとき『夜と霧』のフランクルの言葉を思い出しました。彼はアウシュビッツから生き延びた数少ないユダヤ人の哲学者です。そこでの経験から記した言葉です。

人間は運命に打ちひしがれるだけの存在ではない、悲しみは忘れるものでもなく、乗り越えるものでもない、ということを知った。そしてそれは笑いとも共存しているのだ。

闇に光を

今回、A.Tさんが単独で現地に行かれたことに、私は横浜港南台教会に希望を見る思いがします。

今から50年ほど前、『回転木馬』というミュージカルの映画がありました。その中に“You'll never walk alone”(あなたは一人ぼっちで歩いているのではない)という歌があります。

When you walk through a storm / Keep your chin up high, / And don't be afraid of the dark. / At the end of the storm is a golden sky / And the sweet silver song of the lark / Walk on through the wind, / Walk on through the rain, / Though your dream be tossed and blown, / Walk on, walk on, with hope in your heart, / And you'll never walk alone, / You'll

never walk alone!

あなたが嵐について歩む時 / あなたの顎を引き上げ / 闇を恐れることを止めなさい / 嵐の終わりには金色の空 / そして銀色の雲雀のさえずり / 風に向かって歩め / 雨について歩め / たとえあなたの夢が蹴散らされ吹き飛ばされても / 歩

み続けよ、歩み続けよ、心に希望を抱いて / あなたは決して一人ぼっちではないのだから / あなたは決して一人ぼっちではないのだから。

若者には、ぜひ現地に行ってもらいたい。そこで「闇の中に光」「絶望の中に希望」を見出すことを学んでいただきたいと思います。



## 原発さえ無かったら

福島市在住 M.I

はじめに、先日の横浜港南台教会社会委員会学習会では大変お世話になりました。他県から来たおよそ信心の薄い私のような部外者でも暖かく迎えて下さった皆様の優しさ感激しました。牧師の秋吉先生、学習会を主催された社会委員会の方々、ならびに横浜港南台教会の皆様深く感謝致します。また、今回こうして文章を書く機会を与えて下さいましたO様にお礼申し上げます。

福島第一原発の事故の後、放射能は60km離れた福島市の私の地元にも降りかかって来ました。事故直後、原発の専門家がラジオで安全だから落ち着くようにと繰り返し放送していました。それを聞いて、私は自転車で屋外を水や食料の調達に走り回っていました。しかしその後、だいたい放射性物質の拡散の実態が明らかになり、以前は当たり前のようにあった土、水、空気、植物などの物や風景が信用できない物となってしまいました。原発事故から一年半が過ぎた今でも、あらゆる日常活動の障害となっています。

最近放射能を心配する事に疲れ果て、諦めムードが広がり、放射能汚染の事を考えるのをあえて避ける風潮が広がっているように感じます。今年の六月に福島市議会で大飯原発の再稼働に反対する決議案が出たのですが、意見が割れて結局僅差で否決されました。原発事故の影響は津波の直接的な惨劇とは異なり、目に見えないため実感がわきませんが、台風や余震が来るたび、事故処理中の原子炉でまた何か起こるのではとハラハラしています。

原発事故後、政府は今後事故が起きた場合の避難区域の想定を従来の20kmから30kmへと拡大しました。でも、実際には放射能はその距離をはるかに越えて飛んできます。今回の原発事故では、多くの人々が避難指示区域の指定を受け、自宅に住めなくなり、現在も帰れる見通しが立っていません。狭い仮設住宅での生活が続ぎ、孤立死、地域社会の消滅、家族の離散などが起きています。

子連れなどの若い家庭では、県外に避難する人と地元に残る人の間で、友人との別れや近隣の分断などの問題を抱えています。目に見えない放射線の影響が子供の将来にどう現れるかは誰にもわかりません。避難する必要は無い、いやすぐ避難するべきだ、などの情報が錯綜する中、子供の健康を守ろうとする若い親のストレスは大きいと思います。福島に残った若い家庭では、子供の被曝を恐れて子供の外遊びを控え、辛い話が多くなりました。被曝そのものの影響だけで

なく、被曝に対する恐怖やストレスなどの心理的な影響も、子育てにおいて今後深刻な問題になるのではと心配です。

町村単位で避難指示が出た地域では、家、田畑、菩提寺などをそっくり残したまま集団で仮設住宅に移りました。高齢者は心の拠り所を失い、伝統文化の将来の担い手だった若者の多くは、全国各地へ分散していきました。

原発から比較的遠く離れた地域でも、線量がまだら状に高くなる、いわゆるホットスポットが発生した地区があり、隣同士の家でも線量の測定結果が異なり、片方にだけ避難指示が出るなど、小さな村の中で虫食い状に集落の解体が起きています。

福島の農家は昨年、多くの所で作物の出荷ができませんでした。農村から収穫の喜びが消え、回復の見通しも立たず、離農が相次いでいます。大規模な除染をするなどして農業を再開した農家でも、安全性を確保するために作物の全袋検査などの大きな労力とコストが必要になりました。また、苦労して作物を収穫しても、福島で取れた農作物はどこへ行っても敬遠され、農家は疲れ果てています。農家が廃れると、美しかった故郷の風景もいずれは荒廃してしまうのではと思います。

原発から放出された放射能は、雨や雪にまじり、広範囲に降り注ぎました。除染が行われ、畑は土を天地返しにし、グラウンドは表土を削り取り、公園は芝を剥ぎ、住宅地の周囲の樹木は伐採されました。さらに山地や森林も除染すべきとの声もありますが、それには山を丸坊主にしなくてはならず、現実的には不可能です。シイタケなどの菌類は放射性セシウムを蓄積しやすいため、収穫ができなくなりました。腐葉土に落ちたセシウムは樹木に吸収され、秋になると再び落ち葉となって地表に戻り、長期にわたって森の中でセシウムの循環と停留が起きてしまいます。本来生物の宝庫であった森は、皮肉にもセシウムの貯蔵庫という厄介者になってしまいました。

新聞の記事によると、海外では現在も百基以上の原発の建設が予定されているそうです。原発エネルギーに頼る事はもうやめて、再生可能な自然エネルギーで電力をまかなえるような新たな仕組みを国内のみならず海外へも示していく事が、これからの日本がすべき事なのではないかと思えます。

福島の県民が現在体験している苦悩は、福島で最後になるようにしたい。これと同じ苦悩を将来他県の方々が体験するような事があってはならない。そのためにも現在起きている事をしっかりと記憶し、多くの方々に伝えていきたいと思っています。



#### 社会委員会からのお知らせ

寿町支援と海員宣教支援のための物品を下記の期間に受け付けます。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

12月2日(日)～12月16日(日)

社会委員会の学習会で取り上げてほしいテーマがありましたら、社会委員までお知らせ下さい。